

戦争と、

その戦後の体験記

山形県 舟山 敏雄

私は軍隊に入隊する前に、東京立川市曙町にある陸軍獣医資材本廠輸送課の職長として勤務しておりました。身分は廠内雇員として、内地、朝鮮、台湾、北海道、樺太、その他北支や満州など、各部隊の軍馬、軍犬、伝書鳩などの医薬品を送る任務でした。

昭和十八（一九四三）年一月十六日、満州国の関東軍独立歩兵第一七四部隊に入隊を命ぜられ、広島練兵場に集合させられました。そこで軍装させられて広島駅から汽車に乗せられました。昼も夜も窓は鎧戸を閉めて外は見えませんでした。博多港から船で釜山港へ行き、また汽車に乗って満州国の新京（長春）へ到着して第一七四部隊に入隊しました。

氷点下二五度から三〇度にもなる所へいきなり連れて行かれて、防寒帽を被っていても耳は痛かったのを今も覚えております。新兵は山形県から四十八人だけでした。生まれて初めての炊事、洗濯、掃除と何もかもとまどう事ばかり、少しまごまごしているのと頬が焼ける程のビンタをとられ、これが軍隊なのか、命をかけて戦う準備なのかと、自分なりに納得して懸命に頑張りました。

昼飯を食わずに夕方まで、練兵場を銃を持って走り回された時は命もいらなくなりました。独歩は戦闘部隊で気合が入っておりました。一期検閲が終わって全員一等兵になり、三月三十日、満州第一一四部隊に転属となりました。ここは新京陸軍病院で私たち四十八人は当初から衛生兵としての要員だったのです。

二期目の教育は医学の勉強でした。朝八時から夕方五時まで、毎日医学の勉強です。内科、外科、伝染病、病理、他に研磨科と言って手術などに使

うメスなどの研磨を主体に勉強させられました。広い講堂に机を並べて科目ごとに内科の軍医や外科の軍医が一時間ごとに変わって教えてくれました。居眠りなどしていると、教育担当の上等兵が見廻っていて、後から竹刀で背中を力いっぱいにつつくので、その痛さは翌日までも残る程でした。

夕食の後にまた講堂に集められ、その日習った事のテストがあつて、五十点以下の人は一列に並ばされ、スリッパで思いきりビンタが飛ぶ。私はいやだったもので、消灯後に行つて毎晩復習したものでした。お陰様で四十八人中の七番で三期検閲に上等兵に進級しました。たしか昭和十八年の九月末頃だったと記憶しております。医学六カ月で看護婦長までの教育だと聞かされました。

教育期間が終わつて一週間ずつ、各病棟での見習い勤務でした。見習いが終わつて私は経理課勤務に配属されました。担当は各病棟の消耗品係、酒保の酒や菓子などの品質管理、他に各官舎の石

炭配当係でしたが、軍医が十七人、陸軍看護婦と赤十字看護婦併せて二百五十人、入院患者約五百人の給料計算が大変でしたので、毎月の二十日から経理課全員でソロバン計算でした。銅貨などなく、一銭まで紙幣でしたので指を濡らしての計算は大変でした。

経理課長は陸軍主計少佐で院長は軍医少将でした。経理課勤務は七人でしたが、何かと毎日忙しい職場でした。昭和十八年の十二月初め頃、課長殿に呼ばれて「舟山、石炭の残と伝票の残が合っているか」と言われ「伝票の残の半分位しか現物はありません」と言ったら「それは困つたな、来年四月に関東軍司令部の監査が入るからそれまで何とかならんか」と言われ困つてしまいました。

その時中国人で日本語の二等通訳で公用車の運転手をしている朱と言う人が、関東軍貨物廠の駅に積み替えてこぼれた石炭が山ほどあると教えてくれたので、早速交渉したらオーケーとなつたので、課長殿に「酒保の酒を十本下さい、石炭のお礼に

します」と言ったら「舟山、良くやってくれた」とほめられました。

翌日、中国人の馬車（一トン積み）を五十台手配して運びこんだのですが、三台程持ち逃げされて、憲兵に届けたが犯人はどうなったのか分かりません。

昭和十九年の何月頃だったか、新京にも米機による空襲警報が発令されるようになって来ました。南支那大陸を真っ直ぐに北上して満州に来るとの情報でした。本溪湖と言う街は炭鉱で栄えた街ですが、五月か六月頃でしたか、米軍の大型爆撃機B 25が二百機来襲とのことで、急遽救護班を編成し、私も第一救護班に編入されて現場に到着しました。途端に空襲警報となり、防空壕に入りました。

物凄い地響きをじっと我慢して三十分も待ったでしょうか、空襲警報が解除されて警戒警報になると同時に防空壕を飛び出して救助に向かいました。

た。満州の家は、ほとんどレンガを積み重ねた家屋が多いので、直撃を受けた家屋は跡形もなく消し飛んで、真ん中にスリバチ状の大きな穴が無数にありました。鉄道の線路を目標に落とした爆弾がそれで、電柱がほとんどやられ、半分は折れたり、電線が二、三本残っていたり、逃げ遅れて機銃掃射でやられた死体や上半身土砂に埋もれた死体など、生まれて初めて地獄を見た感じでした。

満鉄の救護班は若い看護婦さんで編成され、テキパキと活躍する姿に舌をまいて呆然と見ていたら、古参兵にどなられて、我に返ったものです。敵機は何班かに分かれて低空で襲撃する。友軍機が体当たりで撃墜した敵機の解体したのを見たら、ガソリンタンクのゴム厚さが六センチメートルもあつたとか、日本の戦闘機は六ミリ位で、全然話にならない、と日本軍戦闘機のパイロットが話していました。

当時の満州国、特に新京は、見た目は安穏でし

たが、時には共産軍との戦いで一個分隊全滅となる戦闘もあったようで、負傷した患者が入院して来る事もありました。また私たちも日曜外出しても中華街には絶対に行かないように注意されておりました。営門の警備も月に一度まわって来ました。夏になると朝早く西瓜を積んだ中国人の馬車が十台も二十台も通り、その中の親分らしい人が大きな西瓜を両手に抱えて「シェイ、シェイ」と営門に置いて行き、時々西瓜を食べることができました。今思うと、あれだけ日本兵は怖がられていたのかなと思います。

昭和十九年十月二十五日、大阪陸軍航空補給廠京城支廠大邱出張所へ転勤となりました。主として九州出身者が多く、六十五人位の部隊というよりも中隊でした。任務は航空燃料のガソリンや九%のアルコールのドラム缶を、下に三本、上に二本重ねて入れ、空襲でも誘爆しないように、言わば航空燃料の疎開作業の任務を遂行する部隊でした。他に朝鮮人の軍属を百人位使用しておりま

した。

昭和二十年六月でしたか、沖縄戦が始まって大邱は航空戦の前線となったので、平坦地へ移動することにになり、北朝鮮の咸興市へ移動しました。任務内容は同じです。私は医務長となり、反射鏡つき額帯と、聴診器を手に持つと立派な医者でした。大邱にいる時もドラム缶で指をつぶしたり足を怪我したりする患者がほとんどでした。大邱では街の歯医者や診療協定を結んだりしましたが、咸興市に移動してからは、適当な歯医者が見つからないことと歯の患者が出ないので、そのままにしました。

ある日突然に、腹痛患者が三人も出て診察したら、赤痢患者でしたので京城支廠へ報告すると同時に、部隊内外の消毒、保菌者調査など完全に防疫作業を徹底しました。二日後に本部（京城）から沢田軍医が来て大変褒められました。人の命の番人として医療業務は大変です。

翌日の朝二十四歳の筆生（軍の雇っている事務員）が呼吸をすると右の脇腹がチクリと痛むと受診に来ました。大きく息を吸い込み吐き出した時に痛むという。後向きにして、両脇腹の後に触って同じ呼吸をさせたら、右手に反応があり、乾性腹膜炎？ と病名をつけて陸軍病院に連れて行きました。院長室に呼ばれたので、診断が間違ったか？ と不安な気持ちで院長殿の前に行ったら、「君の診断は正しかった、聴診器でわかったのかね？」「聴診器には何の反応もありません。触診で判断しました」と言う。「だいぶ勉強したね、ご苦労だった」と褒められました。

昭和二十年七月十日、大阪陸軍航空補給廠から兵長に命ぜられ衛生兵長になりました。その日の夕方部隊長が脳溢血で倒れ、応急処置をして病院に送りました。幸いにして軽かったので半月程で退院して来ました。

中隊には大型トラック三台と小銃七丁が武器で、

後は各自が腰につけているゴボー剣だけ、戦闘などできる中隊では無かった。ときにはB 29の偵察飛行が来て空襲警戒警報が発令されましたが、夜中では隊長は「そのまま寝ている、何もできるわけが無い」と言ってみんな寝たままでした。

日増しに敗戦の様相が濃くなって航空燃料の補給も来なくなり、毎日の仕事が無い。仕事が無いから怪我人も無い、幸い病人も出なくて私も手持ち不沙汰の毎日が続きました。この出張所はドイツ人の医院だったとのこと、二階にもある風呂で打水する事が最大のなぐさめでした。隊長ばかりでなく下士官や医務長の私も利用させて貰いました。

八月に入って何日でしたか、北朝鮮のソ連との国境付近の港町が艦砲射撃を、夜には空襲されたとの情報が入って街はなんとなく騒然として来ました。二、三日したら、避難民らしい姿もちらほら見えるようになってきて、八月十五日に重大放

送があるから第二十四部隊は宮庭に集まれ、との連絡が来ましたが、中隊長が「ラジオがあるから行かなくても良い」と言う事で、兵舎で聞く事になりました。

隊長以下みんな、ラジオの前に座って聞いたのですが雑音ばかりでよく分からなかった。終わってから隊長が「戦争は終わった、敗戦だ、これからどうなるか分からない。支廠に問い合わせても、そのまま待機せよ、との事だ」と言う事で何も分からない。今考えるとトラック三台に分乗してみんなで南朝鮮に南下すれば良かった、そうすれば全員無事に帰郷する事ができたかも知れないと思います。これは結果論であるが、当時はまだ軍の組織がそのまま残っているものと将校も考えていただろうから勝手な行動はできなかっただろう。その為に命を落とした者も多く、運命の別れ道であったと思う。

南下する列車は鈴なりで、北上する列車は回送

車のようでした。「大邱で雇った女子軍属を親の元へ返したらどうですか」と私が隊長に言ったら、隊長が「すぐ返す」と応じました。そばにいた軍曹が「俺が送って行く」と言って出掛けたのですが、果たして三十八度線の国境を無事に出られたかどうか、ソ連軍によって国境が閉鎖される前だったら無事日本内地へ家族ともども帰れたろうが、五人の二十歳前後の娘たちのその後の消息は今も気掛りである。

八月二十五日頃、ソ連進駐軍命令が出て「勝手に部隊解散したり逃亡した者は当事者において銃殺に処す」とのことでした。このソ連進駐軍命令は「若い日本人が街中を歩いていて、ソ連兵が敗残兵と違って打ち殺したとしても文句は言えない」と解釈して部隊は騒然となりました。中隊長は「俺は逃亡して、日本へ帰っても戦犯としてまたここへ連れて来られるから、おとなしく捕虜になって行く、自分の命を間違えなく日本に持ち帰る自信のある奴は自由にして良い」と言うことに

なつたのです。

私は「どうせ軍服を着た時から命は国家に捧げ
てある。捕虜は二年間の重労働で帰す、と言われ
ても秘密軍港構築等させられて、ご苦労であつた
と毒酒など飲まされてもそれまでだ。捕まつて銃
殺されても本望だから自由行動にする」と言つた
ら、俺も俺もと十七人が逃亡する事になつた。武
装解除の命令が来て、全員で軍隊手帳や部隊の作
業日報、会計簿等秘密書類を焼却したり、小銃の
菊の御紋章をヤスリで削り取つたりして準備した。

中隊長は私に「俺は脳溢血で倒れた時、貴様の
救急処置で助かつたお礼に、俺の部屋の布団や、
蚊帳など何でも欲しい物を持つて行け」と言つて
くれました。また「經理の倉庫にある物は奴らが
持つて行くのだから、欲しい物があれば今の内に
持つて行け」と言つてくれたので、近くに住む県
の教育長のお宅に、米、味噌、牛肉の缶詰、石鹼
等の生活用品を運びこんで、逃亡の準備をしまし
た。

八月の末頃だったか、いよいよ部隊がソ連の進
駐軍に連れて行かれる前の日の朝、私は教育長の
家に行つてジャンパーや民間服を貰つて民間人に
成り済まして街へ出ました。間借りして生活する
つもりでした。とある民家を尋ねて「北の清津か
ら避難して来た者ですが空部屋があつたら貸して
下さい」と言つたら、五十歳位の奥さんが「主人
が防衛召集で引張つて行かれたまだ帰つてこな
い、女子供だけで心細いから、どうぞ座敷を使つ
て下さい」と渡りに船の返事でした。朝鮮人の馬
車を頼んで教育長の家から布団や米を運びこんだ
ら、奥さんは大喜びしてくれた。

「家は子供と三人きりですから、食事も一緒に
同居家族として、内地へ帰れるまで居てください」と
言う事で、何の気まづい思いもする事なく住み
込んでしまった。二、三日したら近所の方が、ソ
連兵が民間人の家に来て女を犯したり、欲しい物
を強奪して行くと教えてくれた。

その夜夕飯直後、玄関のドアをノックする音がした。奥さんが玄関のドアを開けたら長身のソ連兵が「ダウワイ」と言って右手を差し出しながら入って来た。驚いた奥さんは玄関にへたり込んでしまった。私が代わって「ダウワイ」と握手した途端に、私の体をまさぐって武器を持つていない事を確認すると、今度は私の腕時計をくれと言う仕草をしたので、仕方なく腕時計をやったらそのまま土足で家の中に入って来ました。そして茶の間の天皇一家の写真を見て、腰の拳銃を手に持ち、その額に向けて「イエース、ノー」と言う。私が「ノーノー」と言い、その額の写真を取り出して火鉢にかざして火をつけたら「ダーダー」と言って納得してくれました。

すぐに玄関を施錠しました。入って来たソ連兵は少佐の肩章を付けていました。少佐が腕時計を欲しがるとは、ソ連と言う国はどうなっているのかと思いました。腕時計は贅沢品で製造販売が禁止され、腕時計を四個か五個持ってモスクワへ帰

ると大金持ちになれるのだ、と後から聞きました。日本家屋、朝鮮家屋の別なく、ミシンとラジオは全部接収されました。

夜となく昼となくソ連兵が三人、五人と来ては「ダウワイ、マダム」と言って女を出せ、と拳銃を向けられました。事前に私はイロリの脇の畳一枚を上げて床板を切り抜いて、その縁の下に新聞紙やゴザを敷いて奥さんと娘を隠して、何とか我が家では被害を防ぐ事ができました。女の人髪を切って顔に鍋のススを塗り見つかからないようにして難を逃れるのに精いっぱいでした。夜には蚊帳の中までローソクをつけて入ってくるので、奥さんと娘は縁の下で夜を過ごしました。

日が経つに連れて、朝鮮の人が日本の憲兵のように市内を見回っているから、以前のようにソ連兵が来なくなつたとのことでした。「今井」と言う名札のついたトランクを抱えてソ連兵が入ってきました。ダンスの引き出しを開けて、中の着

物をトランクに詰め込み始め、外の見張りの兵隊が口笛で合図をしたら、品物をそのままにして、慌てて裏口から林檎畑の間を命がけて逃げてゆきました。表通りを馬に乗った将校がピストルで、しかも実弾を立て続けに打っていました。やはり噂は本当だったと、その徹底した治安の取締りには感心しました。

治安が良くなつて日本人も闇市場へ行かれるようになりました。日本人は政府も戸籍も何もないから配給物資も何もありません。子供が生まれなくても人が死んでも届ける所もない、届ける必要もない、まるで野山に生きる獣同然でした。衛生環境も悪化して発疹チフスが大流行しました。

日本人が死ぬと近所の方が五、六人で線香を上げ、下手なお経を読んで終わり。医者もいなければ坊さんもない。仏様は着のまぎのまま、荷車に積んで共同墓地へ運んで大きな穴へほうり込む。零下二〇度もある冬期間は墓地へ行くまでに死体はカチカチに凍り、カチンコチンと音をたて

て落ちて行く。二、三日すると死体の着物は持ち去られ、男も女も丸裸になっている。

真夏の敗戦で、真冬になつても三十八度線の国境が閉鎖されていて日本には帰れない。日本人が二人集まると、「いつ帰れるだろう」が日常語になつていました。

昭和二十一年一月に入つてからだと思うが、日本人共産党の組織ができて「新生」と言う新聞が配布されました。それによると東京、大阪をはじめ大都市では毎日三万人、五万人と言う餓死者が出ている。日本も食糧不足で大騒動だ、などと報道されて、日本国内も大変なんだ、と思いました。

闇市場の闇米が一升六十円になつて食糧暴動が起き、日本人に外出禁止令が出され一歩も外へ出られなくなりましたが、一週間位で収まったようでした。私も営林署の職員だったと言う若い人と朝鮮人の家に薪割りに頼まれて行き、昼飯つきで一日五円の日当でした。腹いっぱい昼飯が食えるの

で、あちらの家、こちらの家と毎日働きました。敗戦となって朝鮮人と立場が逆さになったのでした。

次の日も天気が良いので二人で薪割りに行ったのは構えの立派な大きな家でした。咸興市の市議会議員で金さんと言う家だと教えてくれました。昼飯にも御馳走が多かった。午後三時頃になったら議員本人が来て「ご苦労、もうやめて下さい、こちらで少し休んで下さい」と言ってお車庫みたいな回りから見えない所へ連れて行かれました。エンペラが敷いてあって、そこへ三人で座ったら、その方は、

「私は十八歳の時に日本の東京へ行って、瓦や土管焼きの技術を習って来たのだ、帰って来てから工場を立てて商売を始めたのが成功して今日に至っている。

貴方がたは敗戦になっても帰る国があるから大丈夫だ、日本人は頭が良いからすぐ復興するだろう。二十年もすればまた軍靴をはいてここへ来る

だろう。

今北朝鮮の若い者は、金日成の反日の呼び掛けに喜んで踊り上がっているが、ソ連の進駐軍が垂れ流している赤札（百円紙幣で色は赤っぽく大きい紙幣）は、進駐軍が引き上げた後は、ただの紙だ。この後始末を北朝鮮国民が、しなければならぬのだ。何十年かかるか分からない。

私も親日分子として睨まれているので市議会議員は明日にでもやめなければ命が危ない」

と言って新聞紙に包んだキムチを五円の日当と一緒に下さった。北朝鮮にも八十歳代の方なら日本語を話す人がまだ残っていると思う。金さんと言う市議会議員の予言は確かであった。と私は今でも思っております。

昭和二十一年の四月になって、巻煙草の製造技術のある者を募集するという記事が「新生」と言う新聞に掲載され、自作した鉛筆で作る巻煙草器を持参して応募しました。「試作品を作れ」と言わ

れて、二十本入りの一箱を作った。二階が工場で一階が共産党の事務所になっていた。煙草を持って下に来い、と言われ下へ降りたら、十人ほどの方が机を並べていました。一本ずつ煙草を吸って紙に点数を書いていました。終わってから「合格だから明日から出勤するように」と言われて翌日から勤務しました。

二階で煙草巻をしていると、事務所の話しが筒抜けに聞こえて来た。四月も半ば過ぎだったか「ブルジョワから先に日本へ帰そう」と言う話が聞こえました。

「旅費を一人一千円にして、二百円をソ連の沿岸警備隊の買収費、三百円を舟賃、三百円を我が党の資金にする。この案でどうだ」全員賛成と答えて決定したようです。私はしめた、このチャンス逃せば日本に帰れないと思って、夕飯の時に尾内さんの奥さんに話したら、「貴方の一千円出すから、一緒に日本へ連れて帰って下さい」と言われました。

尾内さんはご主人が営林署の庶務課長で、隣の官舎の岩政さんが業務課長で、どちらも防衛召集で行ったきり、帰って来ない、いわば母子家庭なのだ。翌日隣にも話して、皆で一緒に帰ろうと言うことになって、ブルジョワ募集の開始の日を楽しみに待ちました。敗戦から九カ月にもなって、しかも日本人には、食糧の配給が何も無い、尾内さん家族も私を含めて一家四人、大根の葉や、闇市場から買って来た牛の内臓などを入れて、私の持ち込んだ米三十キロを食い延ばして、雑炊にして井一杯ずつ、一日二食で日を過ごしていました。頭の良い奥さんに感心しました。

四月も末頃になって、やっと募集が始まりました。最初の日に岩政さんの家族は母と娘の二人なので、六千円を払って申し込みました。後は港へ行く日が、いつになるか、毎日が待ち遠しかったが、中々通知が来ない。内地まで何日かかるかも分からない。その間の食料も準備しなければなら

ない。奥さんが焼き米を作ったり、豆を炒って蓄えたり、また荷物は一人リュックサック一個と決められているので帰る物も限定されている。できるだけ価値ある物を選んだのです。

昭和二十一年五月二十三日午後三時、咸興市の港へ集合通知があつて、奥さんはどうせ持つて行かないから舟山さん、これを着て下さいと言つてお父さんの背広を下さつた。それを着て皆で港の浜へ集まりました。

入り口だけで、窓一つ無い倉庫へ集合させられて、乗船キップを渡されました。一隻の船に百五人ずつ一番船から八番船まで合計八百四十人となりました。若い者が選ばれてその船の役員となりました。各船に三人ずつの役員を立てて世話することになりました。私は五番船に決まった。夕方七時頃暗くなったので一同ぞろぞろと浜辺へ出たら、山の中腹でいきなり自動小銃の音が三十発くらい鳴つて一同立ち止まりました。

共産党委員会の方が慌てて「戻れ、戻れ」と一

同を元の倉庫へ押し戻しました。扉を締めてから「絶対話をしたり音を出さないように」と厳しく注意されました。ソ連の沿岸警備隊がガヤガヤするので、何事かと空に向けて撃つたのだとの事で、九時になってからまた浜へ出ました。今度は何の物音もなく、それぞれの船に乗る事ができました。

船頭さんは四人で、港を出るまで手漕ぎで進みました。港を完全に出てからエンジンをかけて、最初は沖へ沖へと船を進めてから南下しました。三日目になると持参した飲み水が無くなって、船頭のご飯を炊いた釜を洗った水がコップ一杯五円で飛ぶように売れました。三日目の夜半に砂浜へ船をつけて「ここが三十八度線の真ん中の砂浜だ」と下船させられました。一同安心して浜辺の道路を南下したら、橋があつて保安隊が警備していました。銃剣を突き付けて「誰か」と言われたので、私が先頭へ出て、説明したら、目上の方が「こちらへ来なさい」と言つてまた倉庫の中へ入れられ

ました。

乗船キップは乗船の時皆取られました。私は役員で人数確認等をやっていたので、渡さずに乗船したので持つていて良かった。保安隊の部隊名が入っていたので、そこへ電話をかけて事情が分かった。そこで別の船を用意して上げるが、一人三百円別途に払って下さい」と言われて、皆から三百円ずつ集めました。中には金の無い方もいたので、私が「同じ日本人なのだから持っている方が出して下さい」と言ったら素直に出し合って三万五千円集まりました。そして夕方そこから船出しました。

翌朝未明に砂浜に下船させられて、歩き出すと南からトラックが来て「何をぐずぐずしている、女、子供、老人をトラックに乗せろ、若い者は走れ、ぐずぐずしているとソ連兵が来て連れ戻されるぞ」と女、子供、老人を乗せて走り去りました。私たちは慌てて走り出しました。二十分位し

たら、さっきのトラックが迎えに来てくれました。

トラックが到着した所には米軍がいて、女と男が別々に並ばされて、頭と股間にDDTを振りかけられました。北からの発疹チフスの予防だとすぐ分かりました。それから米軍の難民収容所へ入れられ、ここでは昼の食事も夕飯も出ました。寝る所は畳の部屋でした。

夜半になって米兵が通訳を伴って来て「病人や怪我人はいないか、朝鮮人に乱暴されたりはしていないか」と見廻りに来ました。北朝鮮ではソ連兵が、夜ローソクをつけて来て女を出せ、と言うのに、ここではまるで地獄から極楽へ来たみたいだと一同喜びました。

翌日汽車に乗せられて釜山の収容所へ入って一泊しました。

五月二十九日、上陸用舟艇でリバティー船に乗り夕方博多港へ到着しました。その夜は船で一泊して翌日上陸しました。その夜、尾内さんの奥さ

んが、甲板で沈痛な顔をして波間を見つめているので「どうしましたか」と尋ねたら、「私は朝鮮にいて主人の実家には行ったことが無い。主人のいない実家へ子供二人を連れての居候では気がひける。妹が北海道にいるのだが、どうしたら良いのか、思案に暮れている」と言うことでした。

そこで私は、兵隊であった事を詳しく話をしたら「舟山さんが兵隊であったとは全然気づかなかった。二度も厳しい敗残兵狩りに、よくまあ逃れて良かった。舟山さんが来てくれなかったら、私達や岩政さんが内地へ帰れなかった。良い方に出会って本当によかった」と喜んでくれました。私は「奥さん約九カ月もの長い期間食べさせてくれて有難う。俺の生家は農家で、回りは全部田圃だから、もし良かったら山形へ皆で行こう。必ず食べ物はありますよ」と言って尾内さん親子を連れて山形へ帰る事にしました。

翌日、上陸したら「世話部」と言って政府の出

先機関のような所があつて「外地から復員された軍人の方は戸籍を戻す必要がありますので必ず申し出て下さい」とスピーカーで呼び掛けていました。早速出頭したら自分ばかりでなく戦友の情報なども色々聞かれ「旧満州や北朝鮮の情報が皆無で、特に軍関係の情報が無い」との事でした。そして現金三百円と地下足袋が支給されました。

威興第二十四部隊の事務に従事していた尾内さんの娘も軍属として申告しました。終わって皆で博多駅から汽車で山形へ出発しました。途中、広島駅を通過したら街は見渡す限り焼野原で、満足な家並が見えて来たのは十分も経ってからでした。大阪から日本海廻りで新潟を通って山形の実家へ帰ったのは、昭和二十一年五月三十一日の午後三時頃でした。

翌日から実家の田植えが始まり、生まれて初めて田植えをしました。尾内さんの家族は主人の実家や北海道の親族と連絡がついて、半月ぐらいで群馬県のご主人の実家へ帰られました。帰って三

十分位したら髭ボウボウのご主人が、無事復員してきました、とのことで、私も喜びました。

すべてが約六十年も前の体験ですが、子や孫にこんな体験は絶対にさせたくありません。現在、二二〇平方メートルの住宅で、宅地は七〇〇平方メートル、納屋、車庫、田圃五〇〇〇平方メートル、親子三代の同居家族です。妻は四年前に他界しましたが、静な余生を過ごしております。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十八年一月十六日、満州国の関東軍独立歩兵第一七四部隊に入隊を命ぜられ、満州国の新京へ到着して同部隊に入隊する。

この部隊は戦闘部隊で気合が入っており、一期検閲が終わって全員一等兵になったが、三月三十日、満州第一一四部隊に転属となる。この部隊は、新京第二陸軍病院、筆者たち四十八人は当初からこの陸軍病院の衛生兵要員だったの

である。

昭和十九年十月二十五日、大阪陸軍航空補給廠京城支廠大邱出張所へ転勤となり、航空燃料のガソリンやアルコールのドラム缶の疎開作業の任務を遂行する部隊であった。

昭和二十年六月、沖繩戦が始まって大邱は航空戦の前線となったため、北朝鮮の咸興市へ移動した。

昭和二十年七月十日、衛生兵長になり、日増しに敗戦の様相が濃くなってきている。そして八月に入って、北朝鮮のソ連との国境付近の港町が艦砲射撃を、夜には空襲されたとの情報などが入ってくるようになった。

当時、ソ連軍の北朝鮮方面への侵攻状況を見ると、七月九日未明、ソ連軍は、水流峯方面から豆満江慶興橋梁を突破して北朝鮮に侵攻してきた。十日には雄基及び羅津に上陸、豆満江下流にあった混成第一〇一連隊は会寧方面に後退し、羅津要塞守備隊はソ連軍に抵抗しつつ十八

日には古茂山に後退し、その時に停戦命令を受領している。

一方、清津港には一個大隊のソ連軍が上陸、地区所在の部隊と交戦があつたが、さらにソ連軍は一個師団を上陸させたため、我が邀撃部隊は元の陣地に復帰している。また約一個旅団のソ連機甲部隊は慶興方面から南下し、先の我が邀撃部隊は、清津港上陸のソ連軍とソ連機甲部隊の合流を阻止しつつあつたが、やはり十八日に停戦命令を受けている。

筆者のいた咸興方面は、第三十四軍が第五十九師団、第一三七師団により定平西方の高地を占領して敵に備えるという態勢を取りつつあつたが、これは交戦するに至らずに終戦となつて

いる。

筆者は、当時の模糊とした状況を記録しているが、実際には、あらゆる方法・手段を講じて終戦による停戦命令の伝達に務めたと言われる。

しかしこれらの実際の交戦のあつた戦域では、混沌たる状況にあり、到達困難な部隊も相当に存在して、ようやく八月下旬に特使により停戦を伝達し得たことも事実であつた。

実際に終戦の混乱は、これらの実戦部隊と共に在留邦人等にも予期しない混乱を招き、速い侵攻と鉄道の不通、襲撃、掠奪の横行などが悲惨な状況を呈したことは多く語られている所である。

こんな状況の下で、筆者は民間人になりすましてソ連抑留から逃れ、民間人としてソ連軍と対処したり、朝鮮人の家での労働、巻煙草製造販売の知恵、共産党分子の動き、既にあつた北と南の境界を越えるための帰国旅費の話などを交えて、戦後を語っている。

日本へ帰国できたのは、昭和二十一年五月二十九日、博多港であつた。